

九州アルコール問題学会

子の飲酒家・社会に要因

大人のモラルも指摘

第22回九州アルコール関連問題学会沖縄大会(同運営委員会主催)が5日、那覇市の県男女共同参画センター「ていりる」で始まった。アルコール問題に取り組む九州各県の医療・行政関係者、自助グループの会員ら420人が参加。少年飲酒の背景にある家庭や大人のモラルの問題など、6分科会に分かれて意見交換した。6日まで。



「少年のアルコール・薬物問題」をテーマにした分科会では、県警生活安全部少年課の池原泰子さんが、深夜はいかいと飲酒で補導される少年が、沖縄は人口比で全国1位と説明。養育放棄(ネグレクト)や両親

の不和など、さまざまな事情で家に居づらくなった子どもが集まり、飲酒している現状を指摘した。県警では現在、大学生サポートによる子ども支援や保護者向けカウンセリングなどに取り組んでいるとし、「子どもが帰る家が変わらなければ状況は変わらない」と親支援、家族支援の重要性を訴えた。

同市教育委員会総合青少年課の石原昌英さんは、市内の全中学校で行ったアンケート結果を報告。飲酒経験がある生徒の66%が親や親せきから酒を勧められていたという。石原さんは夜型社会の問題も指摘。飲酒を含む子どもの非行問題は「大人社会の姿勢の現れ」と訴えた。「アルコール依存症」をテーマにした分科会では、鹿児島県の精神保健福祉士、岡田洋一さんが、依存症や統合失調症の親を持つ子どもが不登校や問題行動を起こしたり、家族が地域で孤立したりしている問題を指摘した。

同市教育委員会総合青少年課の石原昌英さんは、市内の全中学校で行ったアンケート結果を報告。飲酒経験がある生徒の66%が親や親せきから酒を勧められていたという。石原さんは夜型社会の問題も指摘。飲酒を含む子どもの非行問題は「大人社会の姿勢の現れ」と訴えた。「アルコール依存症」をテーマにした分科会では、鹿児島県の精神保健福祉士、岡田洋一さんが、依存症や統合失調症の親を持つ子どもが不登校や問題行動を起こしたり、家族が地域で孤立したりしている問題を指摘した。